誰かに作ってもらうって、おいしいね

校　長　　武井　正明

私は昔から俳優の小林薫の大ファン。1989 年私が大学卒業の春、久世光彦演出のドラマ「キツイ奴ら」で、借金取りに追われ、ふたりで夜の流しをやりながら返済していく弟分玉置浩二と息の合った間抜けなコンビを演じた。懐メロのハモリが最高だった。

その小林薫が主演を務める「深夜食堂」が、このほど６シリーズ目を迎えた。

「一日が終わり、人々が家路へと急ぐ頃、俺の一日は始まる…」小林薫の声で始まる。「営業時間は深夜 12 時から翌朝７時ころまで。人は『深夜食堂』って呼んでるよ。メニューはこれだけ。後は勝手に注文してくれりゃあ、できるもんなら作るよってのが、俺の営業方針さ…客が来るかって？それが結構来るんだよ」

食堂に訪れるお客さんとのやりとりやエピソードが盛り込まれた、一話完結のドラマだ。

教員という職業にずっと染まってきたためか、こういう異業種の人達との交流がある「深夜食堂」の世界にずっと憧れみたいなものがある。生前、義父がこの映画を観て「心がほっこりする映画だね」と義母に話していたという。

「誰かに作ってもらうって、おいしいね…」

昔、自分から身を引いた歳の離れた若い恋人のために、頻繁に作っていた想い出の一品料理をマスターに作ってもらう。食べながら、その女性は涙して言うのだ。

この季節になると思い出す。「ワンパターンで…毎度同じやつ」と照れながら、自分の分と息子家族の分のおでんを作って、私の帰りを待っていてくれた親父の面影を。

卵を茹でて、殻を剥くのだって１個１個大変だったはずだ。おでんは親父の愛情そのものだった。朝晩寒くなってきた。あの温かい味が恋しい…。

それを、俺は苦笑して（またおでんか…）と思いながら食べたことさえあった。

なぜもっと感謝の気持ちをもって、優しい労いの言葉を掛けてやらなかったのか。

亡父の事を、またも後悔しているバカ息子がいる。もう今更仕方ないのに…。

今自分ができることは、たまに気が向いた時に、妻や義母に何か作ることだ。



先日は昼食に、ただラーメンの細麺を茹でて、昨日の鍋の残り汁に放り込むだけという、所謂鍋の「シメ」簡単なもの。妻が留守だったので、これを義母に作った。

そしたら義母は殊の外喜んで、ちょっと多いかなと持った量のラーメンをペロリと平らげてくれた。

食べてくれる人が、喜んで美味しそうに食べてくれるのは、本当に嬉しいものだ。

義母には散々作ってもらってきた。今度は自分が少しずつ返していく番だ。